

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

加 美 甲 多

はじめに

鎌倉時代後期の臨済宗の僧に『沙石集』『聖財集』『雑談集』を著した無住道暁一円房がいる。無住は嘉祿二年（一二二六）鎌倉に梶原氏の末裔として生まれ、正和元年（一一三二）尾張長母寺（桑名蓮華寺とも）で没した僧であり、臨済禅、真言密教を中心に修学している。排他的な鎌倉新仏教の中で他宗を認める姿勢を持ち、神仏習合、原始仏教と大乘仏教の平等性といった見地に立っていたことは無住の思想の一端をよく表している。また、無住の著作と『宗鏡録』『大智度論』『摩訶止観』等の諸教要集との関連が既に指摘されている。『沙石集』『聖財集』『雑談集』はいずれも仏教説話集であり、他に師である円爾弁円の法門談義聞書である『逸題無住聞書』を残している。無住と説経（説教）との繋がりからその著作は法談

集、唱導史料的側面を多分に有する。

弘安六年（一二八三）の『沙石集』の編纂から嘉元二年（一三三〇）の『雑談集』の編纂までには実に二十一年もの隔たりが存在し、その間、無住は自らの著作の改稿を積極的に行っていた。無住の思想や説話の方法を理解するためには、伝本の異同に目を向けながら『沙石集』『聖財集』『雑談集』を横断的に見るのが重要である。その端緒となり得るのが『沙石集』『聖財集』『雑談集』には「愚（ヲロカ）」という語彙が多数用いられ、「愚ナル」者たちが登場することである。無住の著作には他の仏教説話集と二線を画す説話が認められるが、仏教説話集という厳しい制約の中で「愚ナル」者が登場させ、笑いの要素を取り入れながら仏道に導いたこともその方法の一種である。『今昔物語集』巻第二八に集積された笑話群は「愚ナル」者を媒として仏道に導こうとは決してせず、編者の価値

観から見て「可咲ク」感じた話を集めた巻となっている。『今昔物語集』全体を見渡しても巻第一「久米仙人始造久米寺語第二四」等に辛うじて笑いの要素が認められるのみであり、仏教と笑いとは結びつかない。説経師が説法に笑いの要素を取り入れ、仏道に導くための寺院説法の場合から落語が創出されていったというような歴史的事実に対して中世期の文献においては仏教と笑いとが結びつくことは稀であり、特に鎌倉時代においては『宝物集』に譬喩經典説話の愚者がわずかに用いられた程度である。つまり我が国の説話集において難解な仏典を解釈するための方便として積極的に笑いの要素を含んだ「愚ナル」者を用いたのは無住が嚆矢と言え、無住の著作に見られる「愚ナル」者について考察することは無住の思想を読み解くためには見逃せない。

そこで本稿では次の二点を中心に考察を行いたい。一点目は、無住が「愚ナル」者たちをどのように描き、そこにどのような意図が存在し、どのような特性が見出せるのか。二点目は、無住の描いた「愚ナル」者たちが中古期と近世期の間である中世期という時代の観点から見て、どう位置づけられるのか。特に「愚(カ)」という語彙や「愚ナル」者と規定できる語彙が用いられている説話、教説に関して分析を行い、無住の著作の特質について検討する。無住の著作によって「愚ナル」者に対する概念が新たに位置づけられれば、

時代の転換期における無住の著作の役割が見えてくるであろう。

一 無住の著作における「愚ナル」者とは

最初に無住の著作における編纂意図を見てみたい。^①『沙石集』の編纂意図については次のような叙述が認められる。「ヨシナキ似タレトモ、愚ナル人ノ仏法ノヲホキ益ヲモ不_レ覚、和光ノ深心モ不_レ知、賢愚ノコトナルヲ不_レ弁へ、因果理定レルヲモ信セサルタメニ、或経論ノ明ナル文ヲヒキ、或先賢ノ残セル誠シメヲノス」(序文)、「才覚カマシキ風情、智人ノ前へ勸メカタシ、誤多義モソムキテ、ヒカ事モ侍ラントハ、カリ思ヒ給_レトモ、愚カナル人ノ法門カタハシ、仏理ノ趣ヲモシラセントテ、和ラケ申也、且ツハ先達ノ口伝也、私ナクコソ覚へ侍レハ、ナトカ少シキノ仏法、値遇ノ便トモナラサラムト存スル計也」(巻第三ノ一)、「有心ノ人此志助_テアヤマリヲタ、シナヲシ、尚モ書統キ給_テ、愚ナル人導_キシテ、見聞ノ人随喜ノ輩、当来ノ互ノ知識トシテ共_ニ讚_ム仏乗ノ因、伝法輪ノ縁トシテ發菩提心ノ種トシ、如説ノ修行ノ糧トセン、弟子カ本意是ニアリ」(巻第一〇末ノ一三)とあり、無住は「愚(カ)ナル人」のために『沙石集』を編纂したことを繰り返して述べている。『聖財集』の編纂意図は「初心_ト同法_ト為_レ愚意_ト法門任_テ手_ト記_ス畢」となっており、「愚ナル」者に類いする語彙は認められない。しかし、『雑談集』の編纂意図には

「大都私ノ愚推ナレドモ、法門ノ大綱、ヨモ相違セジト、存ズル心ニテ、同法ニ物語侍ル分ヲ、十卷バカリ書置侍リ。後見之人、若有錯謬者削之、有道理助之。愚俗之中、仏法ノ信敬之輩、一人モ有ラバ、利益ナルベシ」とあり、「愚俗」という語彙が用いられている。仏教の理を解しないことが「愚」であり、そういった「愚(カ)ナル人」や「愚俗」を仏道に導くことが『沙石集』『雑談集』の編纂意図であることがわかる。ここから無住の著作の主たる享受対象は「愚ナル」者たちであると規定できる。では、無住にとって「愚(カ)ナル人」や「愚俗」とはどのような概念であろうか。そして説話や教説における叙述とどう関係していくのか。次に無住の著作における「愚ナル」者の一例を挙げる。

又世間ノ人ノ愚カナル心、父母・親識・妻子・眷属常ソヒキ遊戯フレ、樂シミ栄エントノミ思ヘリ、サレトモ無常ノ殺鬼ナサケナク、別離ノ苦患難遁ケレハ、老少ノ定マリナク前後ノ相違是多シ、然レハ愛ヲチテ各々家出テ、恩ステ、無為入り、眞実報恩者ノ形成テソ流転三界ノ里ヲハハナルヘキ、世ヲ背実ノ道入物ハ、狂ルハシクヲココカマシキ事ナム世間ノ情只思ヒナレタリ、実トニ愚ナルヘシ、(中略)空一人身過シ、終三途旧里帰ヘラン事、実愚ナリ、(『沙石集』卷第三ノ一)

学人ノ智恵ナキ猶愚癡也。(『聖財集』卷上)

無著云、汝愚也。以舌大乘謗、以舌大乘可讚。(『聖財集』卷中)

維摩經ニ此ノ事説ケリ。智者ニモ、愚者ニモ、親近スレバ、必シモ言説ヲ以テ不教訓。自然ニ化スル也。(『雑談集』卷第一ノ一〇)

無住の著作において「愚(カ)」「ヲココカマシ」「愚癡」「愚者」等の語彙が「愚ナル」者を表すと言える。『沙石集』では世間の人々が愛欲を捨てず、仏道に入らないこと、『聖財集』では神を信仰しないことや仏教を軽んずること、『雑談集』では仏教の理を解しない人々のこと、これらが「愚(カ)」の一例である。特に仏教説話集において「ヲココカマシ」という語彙が用いられていることは注目すべきである。

二 仏教説話集における「愚ナル」者

では仏教説話集において「愚ナル」者を表す語彙はどのような傾向にあるのだろうか。中古期の『今昔物語集』に目を向けてみると「愚(カ)」という語彙が極めて多く用いられている。特に『日本霊異記』『打開集』『古本説話集』『宇治拾遺物語』等、類話関係にある説話において、それぞれ他の作品の本文が「あやしき」等の別の語彙となっている箇所についても『今昔物語集』では「愚(カ)」

という語彙を用いている。また、巻第二八を中心に「嗚呼ノ事」「嗚呼也」「嗚呼ノ者」等といった「嗚呼(をこ)」の語彙も『今昔物語集』では数多く認められる。「嗚呼」は笑話との結びつきが深く、笑いを誘うような行為や常識の欠如に対する評価が「嗚呼」であり、たとえ賢者であっても劣った振る舞いをすれば「嗚呼」であるとする。例えば、巻第二八ノ三四では武士の食事の作法における失態が描かれる。藤原章家のお下がりを頼方が自分の食器に移さず、主人である章家の食器のまま食した上に、そのことを指摘され、動転のあまり口にした飯を主人の食器に吐き出したという説話である。それに対して『今昔物語集』の編者はこう評する。^②

実ニ頼方何カニ思ヒ忘ニケルニカ有ラム。本ハ極ク心賢キ兵ニテ思エ有ケルニ、其レヨリ後ハ、兵ノ思エサヘ劣テ、嗚呼ノ名ヲ取テゾ有ケル。此レヲ思フニ、兵ニテハ有レドモ、心ノ送クレテ、愚也ケルニコソハ有ラメ。

賢者という評価が与えられていた者でも一度の失態によって「愚ナル」者へと転じることを『今昔物語集』は伝える。特に貴族や侍の社会における作法の過ちは取り返しがつかないことが『今昔物語集』では強調され、無作法は笑いの種と見なされる。頼方に与えられた「嗚呼」「愚」という評価が同列に挙げられていることも見逃せない。新大系の「嗚呼」には「振る舞いの拙い馬鹿者の評価」

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

という注釈が付され、「嗚呼」は他の箇所にも「態度や振る舞いが見苦しくおかしい」等と付されている。やはり「嗚呼」は馬鹿者で見苦しい存在となる。『今昔物語集』において「愚ナル」者を表す主要な語彙は「愚(カ)」と「嗚呼」なのである。「嗚呼」は三〇以上の用例が認められるのに対して、「ヲコカマシ」は天竺に住む一角仙人の年老いた様子を「且ハ嗚呼ガマシク、且ハ怖シ」(巻第五ノ四)と評する一例のみであり、「嗚呼ヅク」も二例のみである。「嗚呼ガマシク」は注釈に「愚かしくもあり」と付され、「愚ナル」者と認識される。^③

では時代が下って『沙石集』と同じ中世期の仏教説話集はどうであらうか。『発心集』巻第三ノ七では書写山の客僧が断食によって往生した説話を挙げ、次のように語る。^④

食ひ物をも断ち、身燈・入海をもせんには、誰故発し給へる悲願なればか、引接し給はざらん。さらば、今の世にも、かやうの行にて終りを取る人、まのあたり異香匂ひ、紫雲たなびきて、其の瑞相あらたなるためし多かり。即ち、彼の童子の水をそそぎけんも、証にはあらずや。あふぎて信ずべし。疑ひて何の益かはある。しかるを、我が心の及ばぬまに、みづから信ぜぬのみならず、他の信心をさえ乱るは、愚癡の極まれるなり。

長明は捨身による往生について疑念を持つことや、それによって

他者にも疑念を持たせることを「愚癡の極」みと痛烈に批判する。「愚癡」は仏教において「愚ナル」者を指す代表的且つ普遍的な語彙であり、新大系の注釈にも「愚かさという仏語。真理を悟る能力を欠くこと。無明」と付される。ここでは編者自らの仏教的価値観に齟齬する者が「愚ナル」者となる。同じく巻第一ノ一一では年老いた高野聖が妄念を持ち、周囲に妻帯したように見せかけるが、実は怠りなく修行していたという説話が載る。言わば「偽悪」の僧の一種であり、『発心集』に限らず奇行の僧や狂人のふりをした僧の説話は枚挙に暇がないが、言うまでもなくこれら人々には「愚ナル」者という評価は与えられない。やはり編者の仏教的見地から見た価値基準という物差しによって「愚ナル」者か否かの分かれ目が存在する。

九冊本『宝物集』巻第四末尾には次のような説話が認められる。^⑤

天竺に愚直と云ものありき。恒河川の水の出で、ふか、りける時、愚直、わたるべき事ありて、「この川わたらんや」と人にとひければ、あまりの事なりければ、軽慢して、「つぶふしにぞたつ」といひければ、愚直、この言葉信じてわたるに、蹊にぞたちけり。

注釈には「ばか正直者」と付され、まさに愚直なまでに人を信じ「愚直」が「愚ナル」者と見なす周囲の評価を覆し、奇跡を起こ

したという説話である。愚かな質問をしている点や他者の嘘の忠告を鵜呑みにしている点では一見、「愚直」＝「愚ナル」者であるが、「愚直」は仏教的価値基準に照らし合わせて何ら反してはいない。それどころか仏教に必要な信心を備えていたからこそ、「愚直」は自らの足で恒河川を渡るのである。そして信心のある正直な者が利益を得ることと信心のない不正直な者に仏教的な罰が与えられることは表裏一体である。例えば『今昔物語集』巻第一〇ノ三六や『宇治拾遺物語』巻第二ノ二二では老婆の頑なな信心を馬鹿にした男たちが卒塔婆に血をつけて老婆をからかおうとする説話が認められる。^⑥

この聞く男ども、をこがり嘲りて、「恐ろしき事かな。崩れん時は告げ給へ」など笑ひけるをも、(中略)明日おどして走らせんとて卒塔婆に血を塗りつるなり。さぞ崩るらんものや」など言ひ笑ふを、里の者ども聞き伝へて、をこなる事の例に引き笑ひけり。(中略)かくてこの山みな崩れて深き海となりければ、これを嘲り笑ひし者どもはみな死にけり。あさましき事なりかし。

新編全集の「をこがり」に「ばかばかしかつて」という注釈が付されるように老婆は一旦「愚ナル」者と周囲に認識される。しかし、「をこ」だと馬鹿にされていた老婆の信心が勝り、結局は男たちが

「をこ」となり命を失う。いわゆるノアの方舟伝説にも通じる予言説話であるが、世俗説話集である『宇治拾遺物語』においても説かれるのは正直に信じる心なのである。正直の度が過ぎていても、たとえ馬鹿正直であっても「愚ナル」者の定義には含まれない。一方、同じ九冊本『宝物集』説話でも巻第二ノ三は異なる。

つきに癡と申は、くちにしておろか成るを申なり。むかし、一人の愚人あり。五通相人ひとを相する事たなこ、ろをさすかことし。愚人仙人の徳をほめて、まなこをくしりてとるといへとも、愚人ひとを相するに、たなこ、ろをさすかことし。又、父をくして道を行に、やすまなか為にうへ木のもとにすゝむに、あふと云虫、父のひたひにくひつきたり。愚人、ほうと云ものもちて、あふをうつほとに、ち、を打殺す。父を殺さんとはおもはねとも、愚癡のゆへに逆罪をおかす。三途に墮在して、多生劫のあひた苦けんをうくる、三毒のやまひのゆへ也。このたひよく療治して、悪趣をはなれ給ふへき也。

これらは譬喩經典からの引用である。譬喩經典と言えば『沙石集』が多く引用しているが、『宝物集』においても譬喩經典の引用は認められる。「父を殺さんとはおもはねとも、愚癡のゆへに逆罪をおかす」とあり、父親の頭についた虻を殺そうとしながら父親の頭を打って殺してしまうことは地獄に墮ちるような極めて「愚ナ

ル」行為であり、『発心集』の場合と同じく「愚癡」と評される。先の「愚直」と愚人の対照的な評価、ここに編者の主張が看取できる。編者の有している仏教的価値観という物差しから見ても反していれば「愚（カ）」であり、たとえその行為が一般的には「愚（カ）」な行為と見なされても正直のように仏教的価値観に反していなければ最終的には「愚（カ）」ではなくなるのである。

同時に「ヲココカマシ」という語彙は仏教説話集ではあまり用いられていないことがわかる。敷衍すれば、説話集において「ヲココカマシ」という語彙は用いられにくく、特に仏教説話集においては無住の著作を除けば「ヲココカマシ」の用例は非常に少ない。つまり無住の著作において「愚（カ）」のみならず「ヲココカマシ」のような語彙が頻出すること自体が特徴的なのである。そもそも「ヲココカマシ」は「源氏物語」をはじめとした物語系統の作品に認められる語彙であり、教化を第一に志向する仏教説話集では文脈の中に馴染みにくかったと言えるが、『沙石集』には用いられている点については検討に値する。

これまでの研究史において「ヲコ」や昔話の愚か者譚等を除けば、「愚ナル」者の考察は多いとは言えない。「ヲコ」に対する見方については柳田國男氏^⑤、阿部泰郎氏等の^⑥考察がある。そして、『沙石集』の「ヲココカマシ」については大谷伊都子氏の「一方では」を

「こ」が、もう一方では「をこがまし」が用いられている例は多々ある。そして、こういう場合、両語を置き換えて使ってもほとんど問題が生じないように思えるのであるが、では類義語としての両語の違いはどこにあるのだろうか。これは、結局「をこなり」と断定する形と、接尾辞である「し」がまし」のついた形との意味の違いということに帰結するだろう。(中略)「をこがまし」は、そのように見えるがそれはフリをしているだけであつて、実は「をこ」ではないという場合もある。たとえば、『沙石集』では、自分を「をこ」に見せて難を逃れる人物を「をこがまし」と評している話がある^⑩等のご考察がある。常識からの逸脱が「ヲコ」「ヲココカマシ」であり、「ヲココカマシ」は「ヲコ」と同義の場合と、一種の技芸や生きる手段として「ヲコ」を演じている場合があるとされ、『沙石集』の「ヲココカマシ」も同様の定義の範疇に収められている。以上を踏まえた上で、本稿では「ヲコ」と「ヲココカマシ」の語の相違についても考えてみたい。ここから無住の著作において「愚(カ)」や「ヲココカマシ」といった評価を与えられた「愚ナル」者の用いられ方について見ていく。

三 無住の著作と「愚ナル」者

『沙石集』巻第八の一の巻頭は次のような説話ではじまる。^⑪

和州菩提山之本願僧正ノ御房忠寛正信房云僧有ケリ、アマリ二眠ケレハ、眠正信ト申ケル、御舍利講ノ法用ノ散華スヘカリケルカ、唄ヒク程例ノネフリケルヲ、唄ワリテ、ソハナル僧驚シケレハ、眠ナカラ又物念ナル僧ニテ、錫杖取、手執錫杖ト誦ケルヲ、イカニヤトイワレテ、ヤラ唄カト思トソイ、ケル、又或夜ノ番鳥ノ鳴ケルヲ眠耳、御所忠寛々々ト召ト聞ナシテ、事々シク御イラヘ申テ御所參、イカニ何事ト仰ケレハ、召ノ候ツルト申ス、サル事無ト仰アリケレハ、鳥ノナヲ空声ユヒサシテ、アレニ召ノ候ツルト申ケル、或時御湯ノ汗ヌレタル御小袖伏籠ウチカケテ、例ノ物念ハヌレタルカタヲ上、サカリナル火アフリテ眠イタル程、トクマイラセヨト仰ノ有ケルニ驚見レハ、白御小袖伏籠ノ形ソキテ香色コカレテケリ、アサマシト思カイマキテヌレタル方上ニシテモチテ参リヌ、イマタヌレタルハ何ト被仰レハ、タ、タテマツリ候へ、下ハコカレテ候トソ申ケル、尾籠ナリト被仰、御小袖給テケリ、近比興福寺ノ東門院児アリ、隠所居タリケルニ、春日山ノ方ヨリ鴉一來、此児ノ前眠居タリ、ヲソロシサニ腰刀ヌキテフタトキリテ、ヤカテ絶人シタリケルヲ人ミツケテ、坊カキ入祈ケリ、刀血付キ鴉ノ毛チリタリケリ、サテ口ヲハシリテ、忠寛カナニトナクネフリ居アヤマチタル事ヤスカラストイ、ケリ、トカク祈コシラ

へテ別ノ事ナカリケリ、先生^ニ眠^シ生^ハタテ、モノフリケルニコソ、習因習果ト云事侍ヘリ、弁^ヘ知^ヘシ、常ニ心思^ソミ身^シナレヌルコトハ生^ヲフレトモ相繼^テワスレハ、捨カタクシテ、自^ラセラレ思ハル、仏ノ御弟子舍利仏、五百生地^ニテアリケル故^ニ願^ヒソノ相モエタリ、難陀^ハ色^ニフケル心^ニフカ、リケルカ、羅漢^ノ果^ヲエテ後^ニ先^ニ女人、目ヲカケ、リ、難陀^ハ仏ノ弟ナリ、(以下、譬喩經典に載る難陀の出家説話等、中略)シキテモマナフヘキハ、出離解脫ノ妙因也、眠信房^カ眠^ヲ恐^テ我心^カノ失^テ力^ヲ誠^シヘシ、非^テ知^ル改^ム、是賢^キ心ナリ、⑧此卷^ニヲココカマシキ事ヲ集ムルモ、心賢^キ道^ヲ入^リナリ、

嗚呼カマシキ事ハ一旦人^ノ咲^ヒマネクハカリナリ、世間ノ嗚呼カマシキコト故人^ノカロシメラル、事ハ、罪障ノ、ソコヲル因縁也、又嗚呼ノモノハ多分正直也、タ、思マ、ニイ、振舞、色代^トナクヘツラウ心ナキ故也、コレニヨリテ人^ノカロシメイヤシメラル、金剛般若經云、コノ世人^ノカロシメイヤシメララルレハ先世ノ罪業^キヘテ菩提^ヲ得^テ説^ク、古人^ノノ狂人^ノ如^ク十徳^ヲカクシキ、此意ナ^ルヘシ、失^テカクシ徳^ヲアラワセル、実道^ニサカユ、

忠寛正信房の失敗談とその教説には「愚ナル」者を表す語彙が多数用いられている。忠寛正信房の三種の失敗談から確認すると、法要時、寝ぼけて自分の担当を散華ではなく錫杖と思い込んだ上に、行っている錫杖を梵音と思ひ込む説話。鳥が夜中に鳴くのを寝ぼけて

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

て御所に呼ばれたと思ひ込み、御所に参上し、呼んでいないと言うと鳥のいる方向を指さして、あそこで呼ばれたと返す説話。小袖を乾かすことを命じられ、濡れている方を上、乾いている方を下にしておいてしまい、眼を覚ました後、焦げ跡に驚き、隠すために濡れている方を上にして参上するが、濡れていることを指摘されると「とにかくお召し下さい。(上は濡れておりますが)下は焦げております」と返す説話。そこに「尾籠ナリ」(本稿ではとりあえず「ヲコ」と訓む)という指摘があり、以後、忠寛正信房の鴉、おそらく方角的に見て地獄に堕ちた天狗への転生が描かれ、眠りによる習因習果が説かれる(波線部)。そこから舍利仏や難陀の習因習果が説かれ、難陀の出家説話へと繋がる。笑いの要素を多分に含んだ説話を契機としながら硬質な仏教語の解釈へと移行していき、無住は明確に教化を志向している。「尾籠」は大系に「ヲコ」の宛字の音読という^⑩、新編全集に「愚かさを意味する『をこ』に『尾籠』と漢字をあて、それを『びろう』と音読したもので、『をこ』と同意^⑪」と注釈され、「嗚呼カマシ」は新編全集に「滑稽の意の『嗚呼』に、…らしいの意の『がまし』がついた形容詞。愚かで常識をはずれた行為に対する非難として用いられる。ばかっている。みつともない」と注釈される。「ヲコカマシ」を非難としての語彙とする認識や「ヲコ」が愚かさを意味するという認識等については検討の余地

があり、後述する。

見逃せないのは傍線部で示した通り「尾籠（ヲコ）」「ヲココカマシ」「嗚呼ノモノ」「正直」「古人ノ」狂人」が同列に用いられていることであり、これは注目に値する。従来の仏教説話集では「ヲコ」は仏教的愚とされ、「ヲコ」対「正直」の構図はいつ何時も揺らぐことのない、いわば聖域であった。ところが『沙石集』からは「ヲコ」「正直」の論理が浮かび上がってくる。つまり「ヲコ」と「正直」とは一見、逆の概念のようであるが、実は同一の側面を有しているという逆説が無住の論理なのである。無住にとって「嗚呼カマシキ事」「嗚呼ノモノ」は「正直」「古人ノ」狂人」であり、忠寛正信房は得られなかったが、舍利仏や難陀のように場合によっては「菩提得」る。ここから「ヲココカマシ」「嗚呼ノモノ」「正直」「古人ノ」狂人」が「菩提得」という「愚ナル」者たちに対する無住の極めて特殊な論理が看取できる。この論理は『聖財集』においても見出せる。

発心正直、何行モアレ、実アラハ頭応无思事レ。(中略)
サレハトテ、如レ心振舞、又如レ狂人ナルヘシ。古人有レ道心
如レ狂人也。尤可レ然。但无レ内徳、只常狂人也。只正直、名利
慕敬心ナクテ、住レ慙愧思、捨テ放逸業、漸々内及サハ、強魔業
ナラシ。又昔人如、只疵現、懺悔心実アラ、カ、リトモ自然解

脱期アルヘシ。(中略) 南山大師云、聖賢内智外愚也。凡夫内愚外智也。積玉ヘリ。(『聖財集』巻中)

無住は内面の徳さえ備わっていれば「正直」「狂人」「愚」に振る舞う方が理想であるとする。波線部は『摩訶止観』巻第七下にも見え、「聖徳」については研究史においても多数の指摘がある。「聖賢」は「只正直」で、外は「愚」、内は「智」という、一見「狂人」のように振る舞うと説く。「凡夫」はその逆であり、「沙石集」における論理と一致している。「ヲココカマシ」「嗚呼ノモノ」「正直」「古人ノ」狂人」に加え「外ハ愚」であることも「菩提得」ということになる。ここで「正直」に対する無住の見方を確認する。

或在家人、山寺ノ僧ヲ信ジテ、世間出世ノ事、深ク憑テ、病事モアレバ、薬ナドモ問ケリ。此僧医骨モナカリケレバ、万ノ病ニ「藤ノコブヲ煎ジテメセ」ト教ヘケル。信ジテ是ヲ用ケルニ、万病癒スト云事ナシ。或時、馬ヲ失テ、「イカ、仕ベキ」トイヘバ、例ノ「藤ノコブヲ煎ジテメセ」トイフ。心エガタリケレドモ、様ゾアルラント信ジテ、余リニ取り尽シテ、近々ニハナカリケレバ、少シ遠行テ、山ノ麓ヲ尋ル程ニ、谷ノ辺ヨリ、失タル馬ヲ見付ケリ。是モ信ノ致ス所也。(『沙石集』巻第二ノ一)

正直ナルハ、多クハ其徳アリ。奈良ニ貧シキ寺僧有ケリ。請

用ヲ得テ大ナル餐膳アルヲ、妻子ノ事ヲ思テ、イトクワデ、ヲ
ロシ、テ、「夕方小法師ヲマイラセテ、給ハルベシ」トテ、房
ノ者ニアツケテ帰ヌ。一人ノ小法師ハ他行シテ遅ク帰りケル。
妻子ウエ／＼トシテ有ヲ見テ、トクワセタク思テ、クレ／＼
二頂ヲツ、ミテ、形ヲカヘテ、小法師ガヨシニテ、「彼ノ御房
ノ御ヲロシ、頂候ベシ」ト云ニ、トラセテ後、「小法師トモヲ
ボヘズ。余人バシガ妄語シテ、取カ」トテ、尋テヲヒケルニ、
ハヅカシサニ、ニグル程ニ、古キ井ニ落入テ膳モ皆ウチコボシ、
衣裳湿シ死ナヌバカリニテ、中々世間披露有ケリ。コレ只正直
ニ云テ、小法師ガナクテ、我レト来タルヨシ云タラバ、此レ程
ノ損モ悪名モアラジ。不実中々アシカルベジ。此事存知スベシ。

〔雑談集〕 卷第二ノ四

〔沙石集〕では馬鹿正直なまでの信心によつて「愚ナル」者が賢
者へと転じる笑いの要素を含んだ説話が認められる。これは落語
「葛根湯医者」の原型であり、後世においては笑いの側面から照ら
し出されるが、無住は「或在家人」を笑うどころか、理想的な信心
の在り方とする。まさに「ヲココカマシ」さを有し「外ハ愚」「嗚呼
ノモノ」「正直」「狂人」に振る舞う者が「菩提得」た説話である。
「正直」や「狂人」については先に見たように、これまでの仏教説
話集における評価と変わるものではない。しかし、そこに「ヲココカマ

シ」という包括的基準を与え、「外ハ愚」「嗚呼ノモノ」でさえ、い
やむしろそういった人々こそが賢者となり、悟りを得られることを
無住が定義づけたことに、これまでの仏教説話集には見出せなかつ
た「愚ナル」者への新たな眼差しが看取できる。大谷氏は「沙石
集」における「ヲココ」と「ヲココカマシ」は互換可能であり、特に
「ヲココカマシ」は「ヲココ」の「フリ」をしている場合もあるとされ
るが、『沙石集』においては、むしろ「ヲココ」「正直」という逆説
を端的に表す語彙が「ヲココカマシ」なのである。梵舜本等に存在せ
ず、『沙石集』の初期の本文を示す可能性のある米沢本の巻第八ノ
二には「賊人」を一度は捕えたが取り逃がしてしまつた山寺法師と
若い僧の言動が描かれる。その冒頭と末尾の本文を次に挙げる。

或山寺法師学生侍シカ、世間ノ事ハヲココカマシク見ヘシカ、

：

コレハ嗚呼カマシケレトモ、賊人モ刃傷殺害、我モ損タラマ
シカハ罪ナルヘシ、中ノ罪ナキ事ハヲココカマシク所アルヘシ、
冒頭では「ヲココカマシク見ヘシカ」とあり、一見「ヲココカマシ
ク」見えたが、という文脈の中にある。決定的なのは末尾であり、
「ケレトモ」という逆接を用いながらも「嗚呼カマシ」かつたから
こそ、仏教的な罪を逃れたとし、罪を犯さなかつたのは「ヲココカマ
シキ」所があるからだろうと無住は捉える。「ヲココカマシ」は注釈

にあつたような非難としての語彙や形容詞としての働き以上にその意味は大きいのである。新編全集では「ヲココカマシ」を「愚かな」と訳出しているが、実際には（「愚かに見えて」愚かではない」という意味なのである。「ヲココカマシ」はまさに外は「愚」、内は「智」を表し、「愚」は「フリ」として演じるのではなく、ただ「正直」に振る舞った結果と言える。つまり「ヲコ」な行動は正直な振る舞いに他ならず、それは愚かなように見えるが、実は愚かではないという論理を象徴的に示す概念が「ヲココカマシ」という語彙である。

『雑談集』では不「正直」であることによる悪報を説く。やはり「正直」は無住も好んだ徳目の一種であり、仏教説話集において「ヲココカマシ」「外ハ愚」といった語彙と同等に「正直」を肯定的な意味合いで積極的に用いる用例が存在する。無住の著作は仏教説話集が新たな段階を迎えていたことを示している。全ての用例に当てはまるわけではないが、従来の仏教説話集では否定することしかできなかつた概念の中に無住は肯定的要素を見出したのである。内面の徳が備わっていれば、むしろ「ヲココカマシ」さを有し「愚（カ）」「嗚呼ノモノ」「正直」「狂人」に見える者は無住の理想と言え、仏教の理と齟齬しない「愚（カ）」さ、「ヲココカマシ」さは評価の対象となる。それを端的に表す説話を次に挙げる。

仏法ハイヅレモ、信心ノ人ニ効験有中ニ、信ノ前ニ徳アル事、昔ヨリ今ニヲベリ。昔、智・行・徳タケタル高僧ヲハシケリ。癡病日ヲカサネ、スベテ落ザリケリ。イヤシク、ヲロカナル下郎ノ尼有リケリ。癡病落ス事、スベテ不覚セザリケリ。「カ、ル仁有リ。召レ候へ」ト、人申サレケレドモ、アナヅリ思テ不召。術尽テ召シタリケルニ、タゞ、「サ、コノシコ〜」ト二三下咒シタルニ、ヤガテ落ントシケリ。ヨク〜聞タヅヌレバ、淨三業ノ真言ヲ仮名ニカキタリケルヲ、アマリニ愚癡ニシテ、アシクヨミケルナルベシ。サテコレハ、アシクヨムナリトテヲシヘラレケレドモ、只「尼ガサ、コノシコニテ候ハム」トテ不レ用。コレ信心ニヒカレテ、章句ノヨシアシキニヨラズ。

古物語也。（『雑談集』巻第七ノ五）

「古物語」とあるが、出典は未詳である。「ヲロカ」で「アマリニ愚癡」の尼が「ヲロカ」過ぎて間違つて覚えた出鱈目の真言のみが誰もが救えなかつた高僧の病を救う。先に見たように仏教説話集では固く禁じられ、「愚ナル」者を普遍的に表す仏教語である「愚癡」までも肯定する用例が『雑談集』においては存在するのである。周囲からは「アナツ」られた（馬鹿にされた）尼の途な信心は「ヲロカ」で「正直」で「ヲココカマシ」いからこそ生じる。「愚癡」であることよつて結果的に「愚ナル」者ではなくなるといった逆説

的な無住の論理からは絶対的なはずの仏教的概念が示す模範よりも実際の行いの方が上であるという、これまでの仏教説話集にはなかった先進的で柔軟な発想が読み取れる。

無住にとつての「愚ナル」者たちは次のように規定できる。仏教の理に照らし合わせながら「愚（カ）」「嗚呼ノモノ」「正直」「狂人」「愚癡」が肯定できる場合があり、「ヲコカマシ」という語に集約される。それは『沙石集』『聖財集』『雑談集』を通して変わることのない論理である。従来の仏教説話集においては「愚（カ）」や「愚癡」等が肯定されることはあり得ず（肯定される場合も正直や信心のみ）、「ヲコカマシ」に至っては用いられることもなかった。その点で、これは無住の新たな論理と言え、中世期の中でも無住の著作の前と後で「愚ナル」者に対する理解が異なっていくことを示している。無住の著作は時代の転換期に位置づけられ、「愚ナル」者への眼差しはその変化を表す一種の大きな事象である。同時に笑いの要素が含まれている説話はその滑稽さについて笑うことを志向しているわけではないが見えてくる。

四 『沙石集』伝本と「愚ナル」者

最後に『沙石集』伝本という視点から「愚ナル」者について考えてみたい。『沙石集』伝本は現在、約二二種の写本と約一四種の刊

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

本が存在する。特に写本の市立米沢図書館蔵興讓館旧蔵本『沙石集』（米沢本）や石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）成實堂文庫蔵梵舜本『沙石集』（梵舜本）が重要な伝本と言える。近年に至っても新出伝本として国文学研究資料館蔵大永三年本『沙石集』や牧野則雄氏蔵永祿六年本『沙石集』が発見されており、今後『沙石集』伝本の位置づけの必要性は一層増してくる。¹⁶ そういった中で、先に挙げた巻第八ノ一の巻頭は他の『沙石集』伝本に異同が少ないのに対し、梵舜本の本文のみが大きく異なる。¹⁷ その一種が㊦の部分である。「此卷ニヲコガマシキ事ヲ集ル心、賢キ道ニ入レトナリ。

ヲコガマシキ事ハ、一旦人ノ笑ヲマネクバカリ也」は同様であるが、以後の本文は完全に別文で「智者」からの視点にすり替わっている。他の伝本に共通し、『聖財集』や『雑談集』において説かれる「ヲコカマシ」「嗚呼ノモノ」「正直」「古人ノ」狂人が「菩提得」るという「愚ナル」者たちに対する無住独特の論理が梵舜本には存在しない。

また同じく梵舜本巻第八に特徴的な説話には「愚ナル」者が複数認められる。例えば『沙石集』諸本において梵舜本のみ載る『沙石集』巻第八ノ一五「ヲコガマシキ俗事」である。由緒のありそうな「或俗」の顔の疵の由来が、雷に驚いて落馬し、馬に踏まれた結果であったという愚かさを描く。題目に「ヲコガマシキ」とあるが、

先に挙げたような愚かに見えて実は愚かではないという論理にはなっていない。それどころか「賢」に見えた者が「愚」であったという逆の認識を示す説話であり、これでは仏道に導くことはできず、むしろ笑いを誘ってしまう。巻第八ノ一において巻の編纂意図を明示し無住自身が志向した「愚（カ）」さや「ヲココカマシ」さとはかけ離れており、梵舜本は無住が「愚ナル」者を描いた意図とは異なっている。それを裏づけるのが「カラガマシ」という特殊な語彙である。大系には「唐がましくで、常人とは異なっていることをいうか」という注釈が付され、「カラガマシ」は単に中国風という意味だけではなく普通とは異なつたという意味を表し、この行為の異常性が一層笑いを引き立てている。これは教化ではなく笑いを主眼とした説話と見るべきであり、江戸初期までに笑いの分野が確立されていく中で生成されたものが梵舜本に集積されたという見方が浮かび上がる。例えば浄土宗の説経僧、誓願寺法主の安楽庵策伝の編纂した『醒睡笑』は『沙石集』『雑談集』との類話も多いが、慶安元年版本巻第一ノ一五では『沙石集』の愚者説話を用いながら「たくらた」という新たな語彙によって照らし出す。梵舜本には特殊な語彙が多く、梵舜本の「カラガマシ」等は笑いの空間に通じる語彙の一種であり、無住が用いた「ヲココカマシ」に内包された意味とは

根本的に異なるのである。やはり梵舜本は後世の享受の過程におい

て改編された伝本と見るのが適当であろう。

おわりに

『今昔物語集』巻第二八「近江国矢馳郡司堂供養田楽事第七」に「教円座主ト云フ学生有り。物可咲ク云テ人咲ハスル説経教化ヲナムシケル」とあるように、平安時代から説経の場では教化と笑いとが結びつき、落語の発生とも密接に関連していた。しかし、「愚ナル」者を中心に据え、「愚ナル」者の引き起こす笑いを教化と結びつけながら文献という形で意識的に残したのは我が国では無住の著作が（現存という限定はあるが）最初と規定できる。無住の著作以降、特に一五世紀後半から一七世紀前半にかけて『沙石集』の説話の方法と類似した文献が多く成立している。教化の手段として「愚ナル」者の笑いが用いられた文献の一例を挙げると、法華経注釈書（談義書）では『法華経鷲林拾葉鈔』（一六世紀初）、『因縁抄』（一六世紀）、『直談因縁集』（一六世紀終）等が存在し、特に『直談因縁集』は『沙石集』から多数の説話や教説を用いている。『沙石集』抜書本、改編本では神宮文庫蔵『金撰集』（文明二年書写か）、満性寺蔵抄本『沙石集』（永正四年書写）等が笑いと結びつき、無言上人の説話や齒取唐人の説話等、「愚ナル」者を用いて教化を行っている。我が国の仏教説話集において「ヲココカマシ」という語彙が多

数認められる現存文献は『沙石集』のみであり、無住の著作は「愚（カ）」「嗚呼ノモノ」「愚癡」を愚者として単純に切り捨てるのではなく、「正直」や「狂人」と同一視する。そこに「ヲコカマシ」という評価が与えられ「菩提^ツ得」る場合もあると示すことで新しく柔軟な論理が展開されている。そして無住の著作において「ヲコカマシ」は「愚」に見えて「愚」ではないという逆説を示す語彙であり、時には「ヲコ」や「愚癡」に見える行為を笑われる「愚」の対象から「正直」や信心といった徳目に変換させ、同化させる役割を担っていた。従来の仏教説話集では全く考えられなかった、無住の「愚ナル」者に対する新たな眼差しは後世における仏教の伝播者たちが筆を取り文献を残すに際して教化に「愚」に見える者を用いた心強い前例となり、少なからず影響を与えた。それが結果的に中世期と近世期とを結ぶ時代の架け橋の一種となったのである。

注

- ① 『沙石集』は米沢本の本文の渡邊綱也氏校訂『校訂廣本沙石集』（日本書房、一九四三年）を用いた。『聖財集』は天理大学付属天理図書館蔵本の本文の中世禅籍叢刊編集委員会編『無住集』（臨川書店、二〇一四年）を用いた。『雑談集』は山田昭全氏・三木紀人氏校注『雑談集』（三弥井書店、一九七三年）を用いた。なお、傍線部等は引用者が私に付した。

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

- ② 森正人氏校注『今昔物語集』五（岩波書店、一九九六年）を用いた。
 ③ 今野達氏校注『今昔物語集』一（岩波書店、一九九九年）を用いた。
 ④ 三木紀人氏校注『方丈記 発心集』（新潮社、一九七六年）を用いた。
 ⑤ 小泉弘氏・山田昭全氏・小島孝之氏・木下資一氏校注『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』（岩波書店、一九九三年）を用いた。
 ⑥ ここでは『宇治拾遺物語』の本文である小林保治氏・増古和子氏校注・訳『宇治拾遺物語』（小学館、一九九六年）を用いた。
 ⑦ 拙稿『沙石集』と経典における譬喩——『百喻経』との比較を端緒として——（『仏教文学』第三四号、二〇一〇年三月）等において私見を述べた。
 ⑧ 柳田國男氏「不幸なる芸術（嗚呼の文学）」（定本 柳田國男集」第七卷、筑摩書房、一九五三年）を参照した。
 ⑨ 阿部泰郎氏「ヲコ人の系譜」（『聖者の推参』、名古屋大学出版会、二〇〇一年）を参照した。
 ⑩ 大谷伊都子氏「をこ」系の語彙について（その2）——「をこがまし」を中心に——（『梅花女子大学短期大学部研究紀要』第五三号、二〇〇五年三月）を参照した。
 ⑪ 『沙石集』は伝本間に異同が認められるが、注①と同様に本稿では米沢本の本文を用いた。
 ⑫ 渡邊綱也氏校注『沙石集』（岩波書店、一九六六年）を参照した。
 ⑬ 小島孝之氏校注・訳『沙石集』（小学館、二〇〇一年）を参照した。
 ⑭ 『聖財集』は注①の本文を用いたが、他に私有の東北大学狩野文庫本影印や雲喬智道氏『聖財集』（一切経印房、一八九三年）も参照した。
 ⑮ 『雑談集』は注①の本文を用いたが、古典資料二四『雑談集』（芸林舎、一九七二年）も参照した。
 ⑯ 『沙石集』の諸本関係については拙稿『沙石集』諸本と譬喩経典」

無住の著作における「愚ナル」者への眼差し

九四

〔説話文学研究〕第四七号、二〇一二年七月）や拙稿「梵舜本『沙石集』の本文特性」（廣田收氏編『日本古典文学の方法』、新典社、二〇一五年）等において私見を述べた。また『沙石集』諸本の成立と展開」（笠間書院、二〇一一年）等における土屋有里子氏の詳細なご考察がある。

⑰ 梵舜本の本文は注⑫に同じ。

⑱ 『醒睡笑』は宮尾與男氏訳注『醒睡笑全訳注』（講談社、二〇一四年）を用いた。

〔付記〕 本稿は説話・伝承学会 二〇一五年度大会（於京都女子大学、平成二七年五月三日）におけます口頭発表をまとめたものです。司会をご担当頂きました齊藤純先生、席上でご教示頂きました阿部泰郎先生、中根千絵先生を始め、多くの諸先生方に厚く御礼申し上げます。